様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２０３５７

研究課題名（和文）古代末期環壕集落の形成過程と特質に関する研究

研究課題名（英文）Rethinking the moated settlements in the northern part of the Tohoku District in the Late Heian period.

研究代表者
岩井　浩人（IWAI, Hiroto）

青山学院大学・文学部・助教

研究者番号：１０５８２４１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、東北地方北部に分布する古代末期環壕集落の形成過程を解明することを目的とし、関連遺跡の踏査、遺跡動態および集落構造の分析を実施した。その結果、環壕集落形成に至るまでの地域社会の構造変化は多様かつ複雑であることを確認し、津軽地域の遺跡群の分析においては、10世紀中葉の集落構造の変化が直後の環壕集落の形成に影響を及ぼしている可能性について言及した。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify formation process of moated settlement in the northern part of Tohoku District in the Late Heian period. Therefore I explored the moated settlements, and carried out an analysis of settlement transition and structure. As a result, I confirmed the complex structural changes in the local community. Moreover, I referred to the importance of understanding the moated settlements from a previous settlements structure, in the analysis of western part of Aomori prefecture.

研究分野：歴史考古学

キーワード：考古学　東北地方　環壕集落　平安時代

１．研究開始当初の背景

(1)東北地方北部（青森県,秋田県北部,岩手県北部）では、10 世紀後半から 11 世紀にかけて、壕や溝、土塁といった区画施設で集落全体または居住域の一部を囲繞する環壕集落が形成される。

当該集落は、「防御性集落」「区画集落」「囲郭集落」などとも呼ばれ、区画施設の機能、出現の動機・背景、階層性などについて様々な見解が示されるとともに、東北地方北部における古代社会の変容を象徴する資料として重視されてきた。

(2)多くの見解の中でも、区画施設の防御機能を重視し、成立の背景に軍事的緊張状態や社会不安を想定する説は、学会の中で一定の支持を得てきた。ただし、考古資料の分析から軍事的緊張状態を疑問視する意見や、防御機能を第一義とすることに批判的な意見も多く、定説には至っていない。

(3)環壕集落研究に対しては、考古資料の基礎的な整理が不十分なまま拡大解釈や仮説が先行する状況に、警鐘を鳴らす意見が研究者諸氏から示されている。また、近年は発掘調査の進展により、環壕集落の実態は多岐にわたることが明らかになりつつある。

こうした状況をうけて、考古資料の整理と当該集落の再検討が行われるようになってきているが、そうした研究は緒についたばかりと言える。

２．研究の目的

本研究は、東北地方北部に所在する古代末期環壕集落を対象として、集落研究の基礎である遺跡動態・集落構造の分析から、環壕集落の形成過程と特質を明らかにすることを目的とする。

なお、本研究では、壕や溝が居住域の周辺を閉塞するように巡る集落、および自然地形などを利用しながら、それを補完するような形で環壕状の壕や溝を部分的に配する集落に対し、「環壕集落」の名称を用いる。

３．研究の方法

(1)遺跡踏査　　東北地方北部に所在する環壕集落跡を踏査し、立地および周辺環境を把握する。また、適宜、出土遺物の実見も行い、遺跡の帰属時期などを把握する。

(2)遺跡動態の分析　　平安時代の遺跡調査数が多い地域を対象として、遺跡群の時空的動態を明らかにする。分布状況だけでなく、各遺跡の継続性や集落規模の推移なども問題とし、環壕集落成立に至るまでの地域的な動向を詳細に把握する。

(3)集落構造の分析　　幾つかの遺跡群を対象に、遺構変遷を整理し、環壕集落形成に至るまでの集落構造の変化を明らかにする。なお、集落構造分析の一助として、各遺跡における竪穴建物数の変遷状況や、竪穴建物床面積の規模構成を把握する作業を行った。床面積はデジタルプラニメーターで３回計測し、その平均値を採用した。計測・集計作業は、補助員数名を雇用して行った。

４．研究成果

(1)遺跡踏査

環壕集落、または環壕集落の可能性のある集落遺跡を踏査した。具体的には、林ノ前遺跡（八戸市）、風張(1)遺跡（同市）、早稲田遺跡（弘前市）、石川長者森遺跡（同市）、笹森館遺跡（同市）、乳井茶臼館遺跡（同市）、新田(1)(2)遺跡（青森市）などを踏査した。開発によってその姿が失われている遺跡も多いが、立地や周辺の環境、区画施設の位置関係等の観察に努めた。結果、環壕集落の立地や平面形態の多様性を確認し、当該集落の成因や機能・性格を考察するには、まずは地域の実態に即した検討を行う必要があるとの認識に至った。

(2)遺跡動態・集落構造分析

遺跡動態と集落構造の分析においては、研究方法に示したように、発掘調査が実施された遺跡数が多く、全体構造の把握がある程度可能な環壕集落が所在している地域を選定した。本研究では、秋田県北部米代川流域、青森県域を中心として分析を進めたが、ここでは、明確な成果を得ることができた、青森県西部（津軽地域）の成果を基軸に記述する。

まず、遺跡群の時空的動態、遺跡数の変動傾向等から、津軽地域は幾つかの小地域に区分できることを確認した。具体的には、９世紀後葉に遺跡の爆発的増加を迎えた後は、10 世紀中葉以降、遺跡形成が退潮傾向を示す「津軽平野東南部・青森平野周辺」の地域、

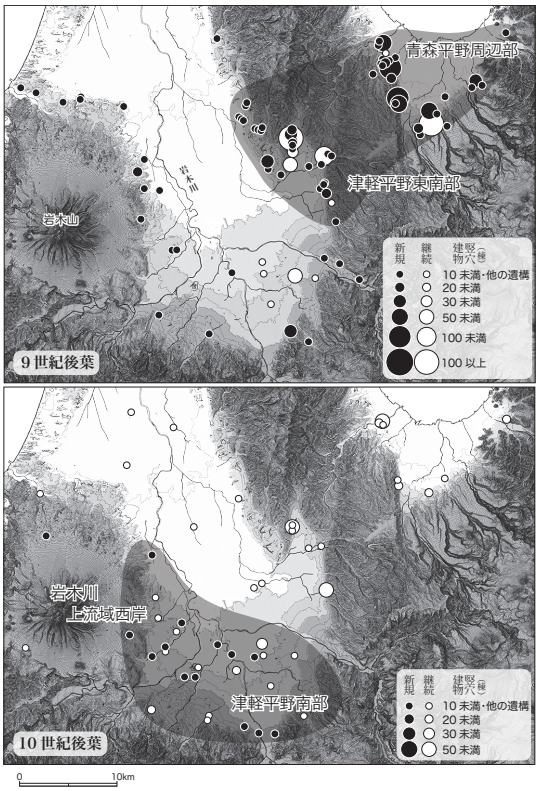

図１　津軽地域の遺跡動態

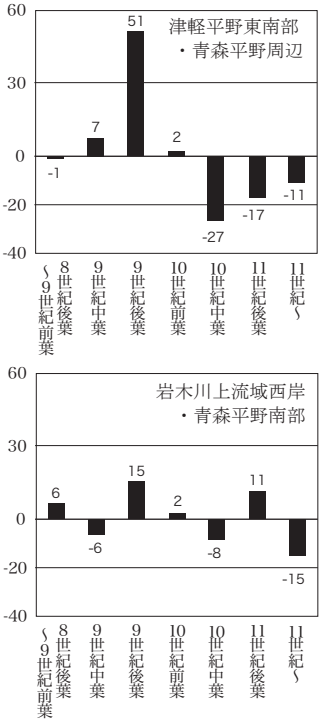

図２　遺跡増減数

脈動的な遺跡の増減を繰り返す「岩木川上流域西岸・津軽平野南部」という地域に区分可能である（図１・２）。

また、津軽地域では９世紀後葉から、竪穴建物に掘立柱建物や外周溝が併設する建物（以下、「複合建物」と呼称）で構成される新興集落群が顕在化することが知られているが、本研究では複合建物の集計と、出土遺跡の分布状況の把握を行った。結果として、津軽平野東南部と青森平野西部では複合建物群で構成される集落と、竪穴建物で構成される一般的な集落がモザイク状に入り組む様相を確認し、当該地域の遺跡動態の急激な変化の背景には、複合建物群に居住した集団の動向が影響していることを、建物数の集計等から明らかにした。こうした状況は、岩木川上流域西岸や津軽平野南部では認められず、環壕集落形成に至るまでの地域の内部構造に差異が生じていたものと推定した。

また、集落構造の分析に関しては、津軽平野東南部に位置する野尻遺跡群（青森市）の分析において興味深い結果が得られた。遺構変遷および竪穴建物の規模構成の変移を詳細に検討した結果、10 世紀中葉段階に複合建物と竪穴建物の混在する集落が出現し、９世紀後葉～10 世紀前葉の集落とは内部構造に差異が生じていることを確認した。また、この 10 世紀中葉の集落は、９世紀後葉～10 世紀前葉に構築された円形周溝群を壊して形成されている。円形周溝群を当遺跡群内に居住した集団の墳墓と考えると、前代の居住集団の墓域を否定した形で集落が形成されており、先の集落内構造の変化と併せて、10 世紀中葉の居住集団に前代とは質的な差異が生じているものと推測される。

遺跡動態と集落構造の分析結果をまとめると、津軽平野東南部などでは、種々の構造を有する集落が複雑に入り組む状況が９世紀後葉から 10 世紀前葉にかけて急速に形成されるが、10 世紀中葉に至ると集落の廃絶と統合が急速に進む。集落内構造に見られた変化は、そうした種々の集落が再編成された結果を示しているものと判断した。一方、岩木川上流域や津軽平野南部では、継続的かつ頻繁な土地の利用（集落の移動）が確認でき、先の津軽平野東南部などのように急激な構造変化は看取できなかった。こうした状況の背景には、岩木川上流域西岸と津軽地域南部における土地の優位性が集団の動向に関係している可能性が高いが、これについては今後の検討課題とした。少なくとも、上記検討によって、環壕集落形成に至る歩みが、小地域間で異なっていた可能性に言及することができた。

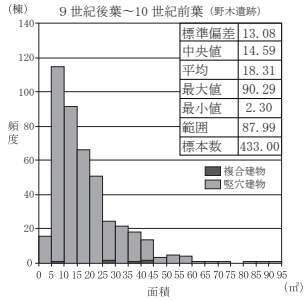

図３　野木遺跡の竪穴建物規模構成

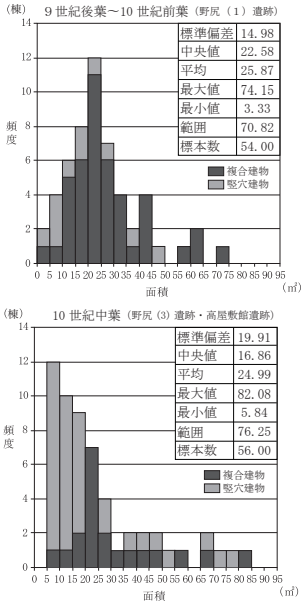

図４　野尻遺跡群の竪穴建物規模構成

なお、野尻遺跡群内の史跡高屋敷館遺跡に成立する環壕集落が、上記の 10 世紀中葉の集落を基盤として成立しているならば、種々の集落の構成員から成る、不安定な結合状態の集団を内包していた可能性がある。高屋敷館遺跡は、他の環壕集落には見られない堅固な区画施設を有し、集落の閉塞性が高いことが知られている。防御機能が備わっていたことは明らかだが、本研究の検討結果からは、集落維持のために強固な中心性の顕在化が必要であったことに対しても考慮が必要と考える。なお、中心性の顕在化といった見解は、既存の研究にも見られるが、本研究の特色は、集落内構造の詳細な分析から、この結論を導き出したことにある。

以上、津軽地域の分析結果からは、環壕集落の形成過程に関し、重要な知見を得ることが出来た。津軽地域以外の地域においても同様の分析を実施しているが、環壕集落の全体像が不明瞭なものが多く、通時的な構造変化の中に環壕集落を位置づけることが難しい状況にある。これらの地域に関しては、資料数の増加などを図り、津軽地域の分析結果と比較検討しながら、早急に結果を提示したいと考えている。

なお、集落構造の分析に際して実施した、竪穴建物床面積の集計作業は、東北地方北部

全体で 2457 棟に及んだことを記しておく。これらのデータは、各地域の集落構造を分析する上で有用なものとなった。今後、何らの形での公表を検討している。

〔その他〕
ホームページ等
http://raweb1.jm.aoyama.ac.jp/aguhp/KgApp?kojinId=abciie

６．研究組織
(1)研究代表者
岩井　浩人　(HIROTO,Iwai)
青山学院大学・文学部・助教
研究者番号：10582413